考古学から見た中世から近世へ

橋　口　定　志

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．“時”を区分する視点
Ⅲ．近世都市へ
Ⅳ．中世的“市・町”の終焉
Ⅴ．精神文化（信仰）と死後をめぐる中世と近世
Ⅵ．考古学からみた中世から近世へ

Ⅰ．はじめに

筆者に課せられた課題は「中世考古学から近世考古学へ」というものである。だが、筆者は“中世考古学”ないし“近世考古学”という概念を用いていない（橋口1992）。論題は必然的に標記のような形になったが、いずれにしろ、課題は当該時期の時の区分を考古学の方法でいかに認識するかというものであり、要するに“時代区分”を考古学の立場からどのようにおこなっていくかということに尽きよう。

ところで、1994年6月に「『中世』から『近世』へ—中世考古学及び隣接諸学から—」と題して帝京大学山梨文化財研究所で開催された『第5回考古学と中世史研究』シンポジウムの内容が、まさに小稿の課題と一致している。そこで報告・討議された内容は豊かで、かつ多岐にわたり、それを想起するだけでこの課題が筆者の能力をはるかに超えたものであることは明らかである。しかし、かつて永原慶二が「歴史におけるどのような個別研究もが、最終的には時代区分の問題に収斂し、それとのかかわりあいをもたざるをえない理由は、そもそも歴史研究の究極目標が歴史的社会の運動の全体像を追求しようとするものであるかぎり、時代区分はそのもっとも煮つめられた結論的な理解を示すものだからである。」（永原1971）と指摘していたことを思い起こし、以下に考えていってみたい。

さて、前述のシンポジウムにおいて考古学研究者からは、飯村均「ムラの『中世』、ムラの『近世』—陸奥南部を事例として—」、佐久間貴士「中世都市から近世都市へ—大坂城下町成立の意義—」、鈴木公雄「出土銭貨からみた中世後期の銭貨流通」、谷川章雄「江戸及び周辺村落における墓制の変遷」の4報告があった（帝京大学山梨文化財研究所編

1994)。これは、都市と村という生活の場の新たな展開を、それを支えた流通（＝生産・消費）という側面、墓制研究を通した社会構造の変化の追究という側面の二面から捉えていこうという論理構成になっていたと思われる。そこで、小稿ではそれを念頭に置いて、次のような問題から検討を始めたい。

II. “時”を区分する視点

いうまでもなく、考古学における時の区分の基本は考古学的遺物の編年研究にある。原始・古代におけるその柱は土器編年であったが、中・近世においてもそれは同じであり、土器・陶磁器の編年研究とそれをより事実に近い形で時間軸上に乗せるための努力は、これまでの中・近世の考古学研究においても中心的な分野の一角を占めてきた。

その中で主要な位置を占める国産陶磁器の編年研究は、瀬戸・美濃窯を中心に進められてきた。瀬戸・美濃窯では、製品の編年と窯構造の変化を軸として、ほぼ研究者間で共通に認識される画期が設定され定着してきている。それを中世後期を中心に要約すると、窯構造は窖窯が15世紀末に至り大窯に、さらに17世紀初頭には連房式登窯へと大きく三段階の変化を遂げており、これに伴い製品も変化を見せる（藤沢1995)。ここでの問題は、大窯の出現、連房式登窯の出現という各々の画期をどう評価するかという点にある。確かに、それぞれの段階における製品の器種組成の変化を重視する視点は“時”の区分に有効な方法である。しかし同時にそれは、需要者側の要求の変化を反映しているものであり、器種組成の変化自体を取って“時代区分”の基底的な認識とすることはできない。その意味では、楢崎彰一が大窯Ⅲ期に茶陶の分野で和物志向への転換が見られることを取り上げ、この段階における畿内都市・戦国城下町への高級飲食器の普及をもって近世的窯業生産の確立を論ずることには違和感を感じる（楢崎1990)。

むしろ、需要者側の要求に答える供給者側の生産体制の変化という側面に留意するならば、窯構造の変化に主眼を置いた分析を行うべきであろう。藤沢良祐は大窯期になると匣鉢の使用量が急増することを指摘し、これは製品の保護・大量生産を目的としたものであるとするが（藤沢前掲)、窖窯段階からは一歩前進した様相を示している。しかし、焼成室が単室であることなどを見る限り、従前の窯体構造とは連続的な変化として理解できるものであり、基本的には中世窯の最後の到達段階として評価するのが妥当ではないだろうか。一方、連房式登窯は複数の焼成室で構成され、燃焼効率の上昇・製品の質の安定や焼成室数の可変性を伴った大量生産の追求といった諸点を特徴として挙げることができる。鈴木重治は、そうした連房式登窯の特性に着目し、併せて“寄り合窯”としての共同利用による危険分散の利点を挙げ、その出現を中世から近世への転換の画期と位置づけた（鈴

木1989)。その中で鈴木は、連房式登窯の初源を16世紀第4四半期に充て、唐津・志野の出現をそれに対応させて、政治史の分野における天正18（1583）年の秀吉による大坂築城と軌を一にした大きな変化と捉えている。

鈴木の指摘は、大窯から連房式登窯という窯構造の変化の背景に生産工程における分業化の進展等の生産体制の変化ひいては生産者集団の集団関係の変化を見通している点で重要であり、首肯しうる内容であるといえよう[1]。そしてそれは、消費地の要請に答える生産体制の構造的転換および製品の変化として捉えることができる。つまり、窯構造の変化は、基本的には“消費地”の変化に対応する生産地の転換であったと評価できるのである。そして、こうした観点から見るならば、生産・流通の側面における中世から近世への変化のより本質的な要素は、消費地の変化の中に見いだす必要があるということになる。

さらに付言すると、消費地における需要の大幅な拡大は、後述の小野正敏の指摘を踏まえるならば、消費地としての“都市”の拡大がその背景に存在したと考えられるのである。

Ⅲ．近世都市へ

中世都市から近世都市への転換をめぐる議論は、とりわけ関西における考古学的調査の進展の中で急速に煮詰まりつつある。しかし、都市とは何か、とりわけ中世の都市をどのように定義し、近世のそれと比較するかが、まず問題になろう。木戸雅寿は、11世紀から16世紀にわたる近江における中世“集落”の消長と変遷を検討して大きく3段階の画期の存在を指摘するが、同時に考古学の立場では「何があれば、どうなっていれば町や都市と呼ぶに値するのか」と問題を投げかけ「中世の町の基準」をどこに置くのか、形態論に止まらない質的な検討の必要性を提起している（木戸1994)。同様に、文献史学の立場から池上裕子は、中世都市研究における現在の到達点について網野善彦の所論を批判しつつ「市場、宿場、町と村落とは明確に対置され、区分されうるものとはなって」おらず「都市と村落とを明確に規定し対置する指標がなお不十分である」ことを指摘する（池上1990)。また、吉田伸之は「都市史の方法的基礎は、骨格論やファジーな“都市性”論にではなく、社会的分業＝所有論をベースとする発展段階論に求めるべき」であると指摘した上で、近世につながる伝統的都市類型として城下町を取り上げ、その基本要素として城郭・領主館、武家地、足軽町、寺社地、町人地の五つを挙げる（吉田1992)。

一方、小野正敏は平泉・柳の御所遺跡の中に出土遺物量が1㎡あたり10点という数値を示す場所があることを指摘し、12世紀における東日本の代表的な消費都市であるとしている（小野1993)。つまり、出土遺物量という面からは大量消費を反映する状況にある“遺跡”を“都市”と認識するということになる。しかし、これは遺跡間の相対的な比較の結

果であり、個々の“遺跡”のあり方に根ざす議論ではない点で決定的なものではない。ただし、大量消費の背景に、都市住民の存在と物流の拠点としての位置を見通すならば、重要な提言といえる。

ところで、前川要はヨーロッパ中世都市研究における近年の動向から「周辺地域に物資を提供する場所としての『中心地』理論が採用され、一定の地域の中で『中心地』機能を持つものを、すべての条件をそろえておらずとも都市と捉えている」ことを紹介し、その観点から議論を展開している（前川1991）。そこで前川は、中心地集落網の確立（15世紀末）、場を取り囲む惣構えの出現（16世紀）、商工業者の凝集（同前）の3点が“都市遺跡の条件”として重要であると指摘する。ここで取り上げられた事例の主要な部分は城下町であったが、恐らくそれは検討に耐える調査事例の少なさに起因しており、結果的にはその研究史的な制約に阻まれて、多様な形で展開されつつある中世“都市”をめぐる議論全体に目配りができていない点が惜しまれる[2]。しかし、いち早く“都市遺跡”の認識視角を示した点で評価されよう[3]。

さて、前川は上述の著書で、織豊系城下町の発展段階を城下町内での長方形街区と短冊型地割の広がりをセットで捉え、武士・商工業者居住地区の空間的な分離度を推し量って図式的に整理し、5様式3段階の変遷を示した。それは、長方形街区・短冊型地割の出現・成立期であるとともに武士・商工業者未分離の段階を“戦国期城下町”（第1段階）、長方形街区・短冊型地割が推定商工業者居住区・寺院地区周辺を覆うとともに家臣団全体と商工業者が空間的に分離する段階を“近世城下町初源期”（第2段階）、長方形街区・短冊型地割が上級家臣団居住区を含む城下町全体を覆う段階を“近世城下町完成期”（第3段階）と整理したものである。また、この段階区分を陶磁器の変遷と結び付け、第1・2段階が瀬戸・美濃大窯の時期、第3段階を同様に連房式登窯の時期とした。暦年代としては、第3段階への移行を17世紀初頭に押さえている。

他方、近年の大坂城下の調査成果をまとめた鋤柄俊夫は、秀吉の死を挟んで実施された大坂城三の丸築造（1598［慶長3］年着手）を境に、豊臣期を前・後期に区分し大坂城城下町の変遷を検討した（鋤柄1994[4]）。その中で、大坂城惣構が完成する前期から、自然地形を大きく変貌させる普請を伴った町造りを行って都市空間を拡大させる後期へという変化を捉える。これを受けた玉井哲雄は、鋤柄の指摘する豊臣後期の画期を「都市空間としてみた場合は決定的な転換点であった」と評価し[5]、規模の拡大が面的・同心円的なものであり、身分により居住地が階層的に区分される近世城下町の都市空間が確立したものとした（玉井1994b）。同時に、この段階で近世につながる短冊型地割が確立した可能性の高いことを指摘する。なお玉井は、前川が長方形街区と短冊形地割のセット関係を指標に近世城下町の成立について論じたことを評価しつつ、町割については「住民が都市的な場を

みずからつくりあげようとした在地の寺内町の建設過程」に注目し、「都市領主が一方的に都市空間をつくるのではなく、都市住民が、都市空間に実質的に関与」していたのであり「住民の目指した都市空間は、近世大名による近世城下町の都市空間形成のなかに、換骨奪胎されて組み込まれ」たと指摘している（玉井1992、1994a、引用は前者）。この玉井の提起によって、“城下町”とそれ以外の“町”を統一的・連続的に捉える視点が初めて明確に示されたといえよう。

堀内明博は、京都における16世紀後半から17世紀初めの変化として、街路が統一基準により幅員５～６ｍ前後に改変され旧来の平安京に依存した道路から脱却する、宅地割りの変化を伴う新たな単位の設置、磚列建物の出現等を挙げ、1589（天正17）年洛中検地や翌1590年の天正地割と軌を一にするものと評価し、これを近世都市京都の成立と捉えた（堀内1991）。

以上のような、前川・鋤柄・玉井・堀内等の指摘する16世紀末・17世紀初頭の段階における中世都市から近世都市への転換は、都市空間の構造的な変化を軸に置いた議論であり、そのレヴェルで共通の認識となりつつある。一方、こうした動向に関連して、近年興味深い問題提起がなされた。

藤木久志が、従来からの豊臣平和令論をより豊かに補強する所説を展開しているのがそれである。その「もし戦争が戦国社会の最底辺を支える生命維持装置であったとすれば、戦場の閉鎖は新たな労働市場の開発を必要とした。『豊臣の平和』に引き続いた朝鮮侵略は、その第一の吸収先であった。また秀吉の大坂築城に始まる、中央から地方にわたる城と城下町の建設ラッシュ、つまり巨大な公共事業の連鎖が第二の吸収先となり…」という指摘は重要であろう（藤木1995）。藤木はそこに「秀吉の平和が直面した都市への激しい人口集中と、それによる都市治安の悪化と農村の過疎化」の構図を見通す。近世の都市下層労働者出現の契機に藤木の指摘を重ね合わせることが許されるならば、近世都市成立の背景をめぐる新たな議論の展開が予測されるのである。[6)]

いうまでもなく、考古学的研究からこうした都市下層民のあり方を捉えるのは、極めて困難である。しかし、1712（正徳２）年に起立した黄檗宗の寺院である新宿区圓應寺跡の調査は、興味深い事実を明らかにした（新宿区厚生部遺跡調査会1993）。圓應寺跡ではＡ・Ｂの２ブロックに分れる墓地が検出されたが、Ａ区は平坦部に立地し生垣・柵を挟んで圓應寺境内に隣接し比較的整然と配置されているのに対し、Ｂ区はその奥の本堂裏の傾斜地に占地して雑然と折り重なり、密集状態で検出された。墓地の形成時期はＡ・Ｂ両区とも18世紀前葉から19世紀である。

検出状況にみるＡ・Ｂ両区間の格差は、後者には埋葬遺構に対応する墓標が存在せず、また副葬品を伴わない遺構が圧倒的多数であり、存在する場合も質・量ともに乏しいもの

であることなど、決定的であろう。注目されるのは、出土人骨の性別個体数を比較すると、女性を1とした時にA区が1：2.7であるのに対してB区は1：7.8と、後者では著しく男性が多いことであり[7]、これはB区出土人骨に壮年男性が多いことに起因するという。栩木真は「A区の母集団は男女比、年齢層のバランスがとれた継続的で安定した集団、B区の母集団は壮年の男性が突出した、男女比・年齢層のいびつな単発的で不連続な集団」であり、前者を圓應寺の檀家、後者を非檀家で「所帯を持つことのできない、あるいは何らかの理由で江戸に流入した、単身者集団」と評価した（前掲報告4章）。また、B区を「墓標なき墓地」と表現した西木浩一は、その被葬者は「巨大都市江戸に分厚く存在していた下層民衆」であり「永続的なイエの縁から切れた下層民衆には、かれらを祠る墓は建てられず、その生前をしのばせる副葬品も添えられることなく、ときには投げ込み同然の様相を呈するほどの密集した墓域、すなわち圓應寺墓域B区に示されるような墓域がその死後の定住地になった」と指摘する（前掲報告2章）。こうして栩木・西木の描きだした都市下層民の最後の姿は、程度の違いこそあるものの藤木が『当代記』慶長2（1597）年正月条を引いて「都の普請人夫の労働は苛酷で、過労と栄養失調のため、夜になると目が見えなくなり、怪我をしたり健康を害ねて、普請に出なければ、雇い主は飯米を与えないから、食えない人夫たちは、乞食になって京都にあふれている…」と示した豊臣期の日用労働者層の姿と重なり合う部分があるように思われてならない[8]。

以上のような観点から、16世紀末ないし17世紀初頭の段階に位置づけられる中世都市から近世都市への転換は、都市空間の構造的変化とともにその住民構成の変化にも留意する必要があると考える。その意味で、近世都市が本格的に展開する段階では圓應寺墓地B区の様相に帰結すると思われる、都市日用層の形成をめぐる藤木の所論はきわめて魅力的なものであるが、居住域・墓域等の調査の中からそれを析出していく作業は、むしろこれからの課題というべきである。

Ⅳ．中世的“市・町”の終焉

中世に出現する特徴的な都市のひとつに堺がある。中世都市“堺”については既に多くの研究が蓄積されており、ここでそれに新たな論点を加えることはできない。しかも、小稿で注目したいのは発掘調査で明らかになった遺構群をめぐる細かい議論ではない。

一般的に、“堺”は自治都市としての性格を持つと理解され、周囲を囲む堀はその自由を護る防禦線としての位置を与えられている。確かに、この堀＝防禦線という解釈は、おそらくある局面を捉えた場合には正しいのであろう。そして、豊臣秀吉に破れた“堺”は、1586（天正14）年に“堀”を埋められることとなる。ところが、発掘調査の結果に見る限

り、その堀は幅を狭められるものの、完全に埋め戻されることなく残された。何故、堀は完全に否定されずに残されたのか、筆者の疑問はここから始まる。

堺は、摂津・河内・和泉三国の境界に位置し、地名もそれに由来するとされる。そして南北に走る熊野街道が町を縦断し、さらに町のほぼ中央から東に直進する大小路（長尾街道）が分岐する。堺の町は、歴史的な境界であり、かつ当時の幹線道路が交差する場に成立しているということになろう[9]。

さて、續伸一郎は中世に遡る堀について「当初は古墳周溝の貯水を潅漑用水として利用した条里坪堺溝として掘削され、その後に町を囲う総構（環濠）として再利用された可能性」を指摘している（續1994）。續は、惣構の形成を織田信長の脅威が頂点に達する永禄期（1558～70）頃とするが、この時点で堀の内側に農耕地が取り込まれている理由を、食料確保その他の都市防衛上の問題に結び付けている。しかし、播種から収穫まで一定の期間を要する農作業の通常のあり方から考える限り、食料確保のために耕地を堀の中に取り込むという理解には無理があろう。理由は別の所にあると思われるのである。

栃木県国分寺町に所在する下古館遺跡は、幅4～4.5m×深さ2m前後の規模を持つ断面形が箱薬研形の堀で南北480m×東西160m程の長方形に区画した中に、建物群・墓域その他が入る遺跡として知られる（栃木県文化振興事業団1984他）。しかも、この長方形に巡る堀の外郭に相似形に巡る堀が存在していることも興味深い。そして、双方の堀に挟まれた中間部分は“遺構”の検出されない空白地帯であった。なお、この堀のうち東辺を画する堀は、遺跡の所属する下都賀郡国分寺町と隣接する河内郡南河内町の郡・町境に一致しており、この遺跡の性格を考える時には無視できない要素であると思われる。また、遺跡の中央を縦断する形で「うしみち」と呼ばれる古道が貫いていることも重要である。この「うしみち」について、石井進は東山道ないし鎌倉街道の一部である可能性を示唆しているが（石井1987）、その妥当性は高いものと思われ、下古館遺跡が当該期の幹線道路を基軸に成立した遺跡であると位置づけておきたい。遺跡の形成された時期は、出土遺物から見て概ね14世紀から15世紀を中心に13世紀まで遡る可能性もあると考えられる。

下古館遺跡と似た事例に、福島県石川町古宿遺跡がある（福島県文化センター1988）。この遺跡は、圃場整備事業に伴い部分的な調査が行われただけで全容が明らかにされていないため、ここでは概要を紹介するにとどめたい。報告書によると、古宿遺跡では断面形が薬研ないし箱薬研形の堀が東西約95m×南北155mの規模の長方形に巡る中に、方形竪穴等の遺構群が入っており、調査前にはその長辺に沿って中央よりやや東寄りを道路が縦断していた。この外周を画すると考えられる堀は、1887（明治20）年の字古宿地籍図によると西辺が字境に一致しており、堀の内側は前述の道路に面して短冊状地割りが施されている。出土遺物に乏しく、遺跡の機能した時期を限定することは困難であるが、15世紀代

の所産と考えられる“かわらけ”や温石等の出土から見て、14～15世紀付近に遺跡の年代を求めることができよう。遺跡の性格について、阿部俊夫は報告書の中で「本遺跡は、中世に、この地域での流通の拠点、あるいは『宿』としての性格を有し、それ故、後世になって『古宿』と称されるようになった」と指摘している。[10)]

さて、水藤真は中世の村・町を堀等で囲む事例を集成して検討を加えたが、「町には比較的囲いの事例が見られたものの、村では今一つ囲う事例が明瞭でない」とし、また扱った事例は戦国期の所産と考えられるものが主体であった（水藤1989）。水藤は、町・村を囲う背景に人的な暴力に対する防禦の必要性を考えるが、戦国期の事例の検討からは必然的な結果であろう。だが、それでは何故秀吉は“堺”の防禦線としての堀を完全に否定しなかったのであろうか。また、下古館遺跡は14世紀には存在しており、早ければ13世紀に遡る可能性を持っている。水藤の摘出した事例より遙かに早い段階で、“堀”に囲まれた遺跡が現れているのである。

江戸周縁部に位置する巣鴨町は、中山道沿いに発達した近世初頭以来の古い町であり、少なくとも中世末までは遡る可能性を持っている。近年、この巣鴨地区における発掘調査で、町の外周を画すると推定される境堀が検出されつつある。遺跡の様相については別稿（橋口1993a、橋口・水本1995）および調査報告書（豊島区教育委員会1996）によられたいが、幅約２ｍ×深さ約1.7ｍの箱堀状を呈する堀を総延長で100ｍ強確認しており、さらに延びることは確実である。しかも、堀底には流水の形跡が無く、少なくとも開削当初は通水機能を持ってはいなかった。この堀は、近世巣鴨町の展開する中山道の南約140ｍ付近を並走する古道に沿った巣鴨町側に掘られており、その状況から、近世巣鴨町の境堀であろうと判断した。だが、出土遺物から見て17世紀末ないしは18世紀初頭の段階ではほぼ埋没し、その後は水路として使われている。ちなみに、前述の水藤の指摘からするならば、巣鴨町の堀は防禦線としては規模が小さすぎよう。同時に、近世に入って開削されたものであるならば、何に対する“防禦”を想定したのであろうか。そして、遅くとも18世紀初頭にはその機能を停止するのである。興味深いことに、境堀の埋没と入れ替わるように、1714（正徳４）年頃に江戸六地蔵の一つ地蔵菩薩坐像が巣鴨真性寺に造立される。まさに、18世紀初頭の段階で巣鴨は江戸の境界に位置していたのである。なお、中山道は巣鴨町を過ぎてすぐに、折戸通り（王子道）と交差する。この折戸通りも近世に遡る古い道で、両道の交差する庚申塚は少なくとも近世には交通の要衝であった（江戸名所図会）。

下古館―堺―巣鴨という三つの遺跡の間には、いくつかの共通項が存在する。その一つは、遺跡の占地する場所が歴史的な境界領域であるということである。下古館は郡境に接し、堺は国境上、そして巣鴨は江戸の境界部に位置している。次いで、いずれも当時の幹線街道沿いに存在するということがある。否、むしろ幹線街道を取り込む形で遺構群が展

開しているとするほうが妥当であろう。この二つの側面は、網野善彦のいう「無縁の場」と大きく重なり合う（網野1987他）。網野は、この「無縁の場」に市・町そして都市が成立するというが、いうまでもなく堺は中世の代表的な都市として知られ、下古館についても、石井進は「市とか宿とか、交通や商業に関係深い場所だったのではないか」と指摘している（石井前掲）。巣鴨については、今のところ確定的な性格付けはできていないが、近世初頭から「町」としての位置を占めていたと推測されるのである。

三者間のもう一つの共通項は“堀”の存在である。13～14世紀に現れる堀で区画された市・町が、連綿と中世後期を生き延び、17世紀末ないし18世紀初頭に終焉を迎えるという変遷を、この三つの遺跡は示しているのではないだろうか。つまり、ここに見られる境堀は、中世的な論理による領域区画の方法だったのであり、そもそもの開削当初から人的な暴力に対する“防禦線”としての機能を持たされていたのではないのである[11]。戦国期“堺”の環濠は、直面する物理的な脅威を前に、この境堀を拡張・補強して対処した施設であったと読み取れないだろうか。そして、巣鴨における境堀の埋没時期は、境界領域に成立する中世的な市・町の終焉の時期を明瞭に示しているのである[12]。さらに、それは中世的な領域区画の方法の終焉でもあった。

Ⅴ．精神文化（信仰）と死をめぐる中世と近世

小稿の冒頭で触れたシンポジウム「『中世』から『近世』へ」における鈴木公雄の報告は、いわゆる「備蓄銭」をめぐるものであった。その中で鈴木は、筆者の「埋納銭」概念を批判して、(1)緡銭状にまとめられて木箱・甕・壷などに収納されているのは再利用を意図している、(2)埋納に際して何らかの儀礼を行ったという考古学上の痕跡に乏しい、(3)多量の銭の埋納を必要とする祭祀が中世に存在したとするならば、なぜそれが近世に継承されないのか、といった諸点を挙げた。しかし、(1)は正当な批判にはならない。むしろ、曲げ物容器に入れて埋納され、後に発見された状況を示しながらも掘り出されなかった平安京左京八条三坊七町の調査事例（京都文化財団1988）を、鈴木はどのように解釈するのだろうか。(2)については、銭を埋める行為自体が儀礼であることを忘れるべきではない。そして、(3)のような展開は、地下式坑（≒地下式壙）や板碑等の存在を想起するかぎり、埋納銭に限った現象ではないのである。鈴木の指摘にもかかわらず、筆者の“埋納銭”理解（橋口1993c等）は今のところ変更の必要性を認めない。その意味で、勝俣鎮夫が「金銭を払う」の“払う”は“祓う”と同義語であり、史料的には豊臣期に入って現れると指摘しているのは重要であると考えている[13]。16世紀後半に至り、銭貨にかかわる基本的な論理が変化していると理解されよう。

ちなみに、鈴木は“備蓄銭”の埋納時期について14世紀後半から16世紀前半までに最盛期があり、16世紀後半には衰退する傾向を示すと指摘した。この鈴木の見解は首肯できるものであり、管見の範囲では17世紀に入る“埋納銭”の出土例は知られていない。そして、鈴木の“埋納銭”衰退時期についての認識は、勝俣の指摘と齟齬しないのである。

ところで、埋納銭が盛期を過ぎる16世紀前半は、いくつかの精神文化（信仰）をめぐる遺構・遺物にも変化が認められる時期である。まず“板碑”を見てみよう。千々和到は、埼玉県比企・大里・児玉三郡の武蔵型板碑造立の様相を分析して、1440～1520年を後期、1520～1600年を終期と捉える。そして、この段階に現れる変化として次の諸点を挙げる。まず15世紀後半には月待板碑、15世紀末から16世紀には庚申待板碑が、村住人を名乗るような人々の村落の年中行事的な集まりである講・結衆を造立主体として造られるようになる。また、15世紀後半には墓碑的な板碑が目立ってくる傾向にあり、その背景には墓制上の大きな変化が予想されるという（千々和1988）。15世紀後半から16世紀にかけて、板碑造立の精神的な背景に大きな変化が起きているのである。そして、近世初頭に現れる舟形光背の墓碑が系譜的に関西起源のものであるとすると[14]、武蔵型板碑は、僅かに庚申塔などの講碑類に系譜を辿れるだけとなる[15]。“板碑”の終焉である。

次いで、地下式坑を見てみよう。地下式坑は従来から墓壙であるとされ、江崎武の研究以降はそれが定説化している（江崎1985）。さらに、近年にいたり改（再）葬墓として積極的に評価しようとする見解も現れている（高尾1991）。だが、地下式坑＝墓壙説は、必ずしも充分な証拠を伴っているわけではない。高尾栄市が力説した人骨の出土状態をめぐる解釈も、決定的な説得力はないのである。むしろ、田中信が埼玉県愛宕神社古墳北遺跡や東京都多摩ニュータウンNo.692遺跡における遺構の展開状況に則して明らかにした、主屋建物に正対する地下式坑のあり方等を踏まえる限り、“地下式坑＝墓壙”一元論には疑問を持たざるを得ない（田中1989）。ここで筆者の考えている地下式坑の性格について議論を重ねる余裕はないが、宗教的な施設であるという点では墓壙説と一致している。また、地下式坑の主要な構築時期は15・16世紀にあると考えられるが、17世紀以降に営まれた遺跡では検出されない[16]。小稿では、この遺構が中世後半に構築された宗教的な性格の強い遺構であり、近世遺跡では見られなくなるという点だけが確認できれば良いだろう。要するに、地下式坑を使う宗教的な行為（それが墓壙であったとしても）は、現時点の認識による限り17世紀以降に引き継がれることがなかったのである。

以上のように見てくると、宗教的ないし精神文化的な側面にかかわる中世の遺構・遺物は15世紀から16世紀にかけて消滅ないし変質する傾向を示しており、おそらくは16世紀後半から17世紀にかけての時期を転換期として質的に大きく変化しているのではないかと予測される。

そうした意味で興味深い指摘を、嶋谷和彦がおこなっている（嶋谷1992）。嶋谷は、古代末から中・近世にかけての地鎮資料を集成し、各時代を通して一貫して存在する輪宝を用いた密教によるもの以外に、16世紀中頃～後半以降に位置づけられる「いわば新規に登場する近世の“地鎮め”」が存在することを明らかにしたのである。これを嶋谷は「中世から近世への宗教観の変容」と捉えていると思われるが（嶋谷1991）、小稿で例示したいくつかの中世的遺構・遺物の消滅と入れ替わる時期であるだけに留意されよう。

こうした傾向は、墓制面にも窺うことができる。17世紀の墓地が調査された東京都千代田区八丁堀3丁目遺跡では、土葬と比較して火葬墓の比率が高く、野沢均は中世墓の系譜を引くものと指摘する（野沢1988）。17世紀段階における埋葬形態の中で土葬に対して火葬が卓越する状況は、千代田区一橋高校地点でも認められ、ここでは火葬骨160体に対して、乳幼児を除く土葬人骨は114体であった（森本他1985）。ただし、ほぼ同じ段階の墓地である港区増上寺子院群では土葬墓が卓越しており、必ずしも野沢の指摘をそのまま認めることはできない。一方、谷川章雄は「17世紀代の墓の埋葬施設は早桶が主体であり、甕棺が少ないことが大きな特徴」で、「中世墓の系譜をひく可能性のある石組や長方形の木棺が見られ、火葬墓の占める割合が高い」のに対し「18世紀以降を中心とする墓地は…（中略）…甕棺を多く用いる墓地と…（中略）…早桶、正方形の木棺を主体とする墓地」があり、埋葬施設の面からは17世紀と18世紀の間に明瞭な違いがあることを明らかにした（谷川1991）。また、シンポジウム「『中世』から『近世』へ」では、18世紀前葉には下層民の墓が明瞭になると指摘し、さらに18世紀前半を近世墓制の完成期と評価した。

墓制の転換は、単純に宗教的背景のみで解釈できるものではなく、“イエ”意識の変化までを読み込まなければ理解し難いものであると思われる。この点で、前述の地下式坑・埋納銭・板碑等が消滅する背景と、必ずしも同一契機に根ざしたものではないかも知れない。しかし、精神文化の変質という側面から見るならば、基底的な宗教観の変化を受けて現実社会のあり方を反映している墓制にも変化が起きるという、一連の動きとして捉えることもできるのではないか。要するに、16世紀代に顕在化する宗教的・精神文化的側面での変化が、18世紀に至り顕在化する現世の物質文化的な側面における本格的な転換を準備することとなるとも考えられるのである。前節で検討した境堀の終焉する時期も、そうした動きと一連のものとして捉えることができると理解しておきたい。

Ⅵ．考古学からみた中世から近世へ

鈴木公雄は、増上寺子院群近世墓地の六道銭を分析した結果から、中世の銭貨（＝渡来銭）から古寛永通宝への転換が、古寛永通宝から文銭への移行や文銭から新寛永通宝への

移行に比べ断絶的であることを指摘した（鈴木1988）。鈴木は、その背景に渡来銭から古寛永通宝への銭貨切り替えが従来理解されていたよりも急速に行われたことを読み取り、古寛永通宝の発行に起因する銭相場の暴落とそれに対処する江戸幕府による貨幣政策のあり方を明らかにしたのである（鈴木前掲、同1991）。

鈴木が出土六道銭の分析を通して明らかにしたように、政治・経済的な側面における時の変化は、考古学的な遺構・遺物の様相においては、多くの場合急速な変化として捉えられよう。だが、一つの時代を形作る諸要素それぞれにおける変化の総体としての“時代”の画期を、特定の要素の転換点を取ってそれに代表させることは難しい。確かに、従来の政治史の分野における画期を“時代”の画期として捉えた時代区分の認識方法に依拠するならば、それも一定程度可能ではあろう。しかし、物質文化の変化に依拠して考古学の方法による“時代区分”を試みようとする場合、それは不可能に近い要求なのである。

小稿で見てきたいくつかの要素は、いずれも16世紀後半から17世紀にかけて一定の質的な転換を遂げていた。この結果を踏まえる限り、中世から近世への移行はこの概ね150年という期間をかけて、大きく動いていったということになろう。そして、筆者自身は17世紀を中世の残滓が払拭される時期と捉えている。また、近世の萌芽を16世紀中に見いだすことも可能であると思われる。この間を、広い意味で中世から近世への移行期であると理解しておきたい。

その中で、政治・経済史的な変化に大きな比重をかけた評価をしようとするならば、16世紀末における中世都市の近世都市への転換を見落とすことはできない。それは、例えば窯業生産地の構造的な転換をも促すものであり、必然的に時間の尺度となる土器・陶磁器編年の上でも捉えることができる画期を形作ったのである。しかし、小稿では具体的に取り上げていないが、中世城館から近世城館への転換を考える上で“元和一国一城令”に代表される17世紀前半における江戸幕府の城郭政策の持つ意味も軽視されるべきものではなく（福田1995）、考古学の側でも破城をめぐる議論は急速に深化しつつある。中世城館が“時代”を象徴する遺跡であると認識するならば、この17世紀前半はそれが終焉を告げた画期と位置づけられるのである。だが、藤木久志の仮説を念頭に置いて（藤木前掲）、城館をめぐる一連の政策もある部分では都市政策の一環であると捉えるならば、両者は連続する画期ということになろう。こうした政治・経済史的な側面に関わる諸要素の転換点は、16世紀末から17世紀前半に集中する傾向を持っており、この段階を狭義の中世から近世への移行期と捉えることが可能であると考える。

以上のささやかな検討の結果から、考古学的な方法で中世から近世への移行期を追究しようとする場合、少なくとも中世史研究の側からは17世紀までを、また近世史研究の側からは16世紀からを、検討の対象として射程に入れる必要があるものと考えるに至った。そ

して、考古学の方法による中世から近世への画期の検討は、中世・近世の双方からの当該期の詳細な分析を経て、より煮詰めた議論を展開するべきであるといえよう。

小稿が編者の要請に答えられたかどうかはなはだ心もとないが、筆者のこれが限界であった。また紙数の関係から筆者の当面する関心に重点を置いたため、城館・村落など重要ないくつかの分野の検討を省略せざるを得なかった。いずれこの欠を補いたい。なお、文中の引用に際しては敬称を省略させて頂いた。文末ながらお許しを乞いたい。

（豊島区教育委員会）

註

1）ただし、橋本久和の批判は踏まえる必要があろう（橋本1990）。

2）結果的に、近世都市の成立を見通す作業は、城下町を中心として展開されている。

3）“都市考古学”という用語は、既に古泉弘が用いている（古泉1983）。また古代学研究会は《特集：現代都市と都市遺跡》を古代学研究69号で組んでおり、坂詰秀一が「江戸」を執筆している（坂詰1973）。だが、古泉の場合は“近世都市江戸”の調査を意図する都市考古学であり、古代学研究会の特集は“現代都市の開発と都市遺跡”といった観点からのものであった。

4）豊臣期を前後２期に区分する認識はすでに鈴木秀典が示しており（鈴木1991）、鋤柄の議論はそれを踏まえたものである。

5）玉井哲雄は“都市空間”を「都市の場を具体的に指し示す場合に用い、…平面的な要素を都市形態、…立面的な要素でもある都市景観という二つの意味内容を含む」としている（玉井1994a）。

6）もちろん、中世の宿は「地域の流動的労働力の滞留の場」であったという指摘もあり（稲葉他1995）、都市下層民の系譜を藤木の指摘に一元化はできないことも確かである。

7）ちなみに、武士階級の墓地と考えられる増上寺子院群では、17世紀代の埋葬者のうち性別が判明する事例の男女比を見ると、女性１に対し約1.3となり、17世紀前半に限ると約2.2となる（奈良1988）。また、下町の町人層の墓地と考えられる千代田区一橋高校地点では、女性１に対して３である（森本他1985）。圓應寺Ｂ群ほどではないが、近世初頭の江戸では、武士・町人ともに男性のほうが多かったことを示している。

8）いうまでもなく、藤木の所論は16世紀末から17世紀にかけて、圓應寺墓地は18世紀から19世紀の所産という時間的差がある。この空白部分を埋めるには16世紀末から17世紀にかかる墓地の分析が不可欠であろう。この時期の墓地の調査には、江戸では中央区八丁堀三丁目遺跡・千代田区都立一橋高校地点・港区増上寺子院群などある。だが、圓應寺墓地Ｂ群のような都市下層民の埋葬地として明確に捉えられる事例は無い。

9）堺に関する一般的な記述は、原則として續伸一郎の論考によっている（續1994）。

10）この他、水藤真が紹介した福井県坂井郡金津町桑原所在の「桑原館」も、地籍図に見る範囲では同様の事例ではないかと思われる（水藤1989）。

11）中世的領域区画の方法として、境堀を掘削するというあり方が多様な形で存在することは、既に指摘したことがある（橋口1990他）。

12）中世起源の「堀」が近世に入って埋没する場合、巣鴨町境堀の埋没と似た傾向を示している。例えば、中世寺院に関係すると思われる東京都柴又帝釈天遺跡・上千葉遺跡では、16世紀に掘削された堀が17世紀に入り自然埋没している（橋口1993b）。

13）勝俣の指摘は、シンポジウム「『中世』から『近世』へ」の討論における発言である。

14）いささか古い事例であるが、京都府木津惣墓では16世紀中葉の天文年間に光背型の墓標が出現し、17世紀に造立のピークを迎える（坪井1939）。なお、ここで光背型としてまとめたものには、谷川章雄の「頭部が三角形を呈する断面舟形」のものと「舟形光背に仏像を半肉彫りにした」ものが含まれる（谷川1991）。

15）千々和によると、近世初頭の庚申塔は板碑型のものが多いという（千々和前掲）。

16）近世の「地下室」が系譜的に中世起源であるかどうかは、筆者自身は未検討である。しかし、ある程度使用方法が明確な近世「地下室」の様相から判断する限り、両者は別個のものであると考えている。

引用文献

網野善彦1987『増補 無縁・公界・楽』平凡社

池上裕子1990「市場・宿場・町」『日本村落史講座2 景観Ⅰ』雄山閣

石井　進1987「鼎談 中世への回路（網野善彦・石井進・川村二郎）」季刊自然と文化18

稲葉継陽・菊池浩幸・釈迦堂光浩・田中克行1995「『地域社会論』の視座と方法」歴史学研究674号

江崎　武1985「中世地下式壙の研究」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学出版部

小野正敏1993「中世みちのくの陶磁器と平泉」『日本史の中の柳の御所跡』平泉文化研究会編、吉川弘文館

木戸雅寿1994「考古学から見た中近世集落の発展と都市・町の成立とその問題点」中世都市研究1号　中世都市研究会、新人物往来社

京都文化財団1988『平安京左京八条三坊七町―京都市下京区東塩小路町―』

古泉　弘1983『江戸を掘る―近世都市考古学への招待―』柏書房

坂詰秀一1973「江戸」古代学研究69号

嶋谷和彦1991「“地鎮め”遺構の諸相」『近世都市の構造』第3回関西近世考古学研究会大会発表

要旨
嶋谷和彦1993「“地鎮め”の諸相」関西近世考古学研究Ⅲ　関西近世考古学研究会
新宿区厚生部遺跡調査会1993『東京都新宿区 圓應寺跡』
水藤　真1989「村や町を囲うこと」国立歴史民俗博物館研究報告19
鋤柄俊夫1994「大坂城下町にみる都市の中心と周縁」中世都市研究１号
鈴木公雄1988「出土六道銭の分析」『増上寺子院群』東京都港区教育委員会
鈴木公雄1991「地中から掘り出された近世像―六道銭の考古学」『争点日本の歴史』５巻、新人物往来社
鈴木公雄1992「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」史学61巻3・4号
鈴木重治1989「中世から近世への画期」中近世土器の基礎研究Ⅴ
鈴木秀典1991「大坂城跡の豊臣前期と豊臣後期」関西近世考古学研究Ⅰ
高尾栄市1991「中世の葬地」『五段田遺跡Ⅱ』同調査会編、東京都板橋区
田中　信1989「地下式坑遺構群の配列規則について」『愛宕神社北古墳遺跡』埼玉県川越市遺跡調査会
谷川章雄1991「江戸の墓地の発掘」『甦る江戸』江戸遺跡研究会編、新人物往来社
玉井哲雄1992「近世都市空間の特質」『日本の近世』９巻、中央公論社
玉井哲雄1994ａ「町割・屋敷割・町家―近世都市空間成立過程に関する一考察―」年報都市史研究２号
玉井哲雄1994ｂ「都市空間における中世から近世への転換」中世都市研究１号
千々和到1988『板碑とその時代』平凡社
續伸一郎1994「中世都市堺―都市空間とその構造―」中世都市研究１号
坪井良平1939「山城木津惣墓墓標の研究」考古学10巻５号
帝京大学山梨文化財研究所編1994『「中世」から「近世」へ』第５回考古学と中世史研究シンポジウム資料集
栃木県文化振興事業団1984～89『自治医科大学周辺地区』昭和58～63年度埋蔵文化財発掘調査概報
豊島区教育委員会1996『巣鴨町Ⅱ―東京都豊島区における近世町場の発掘調査―』
永原慶二1971「時代区分論」『講座日本史９―日本史学論争―』東京大学出版会
楢崎彰一1990「総括」『尾呂』瀬戸市教育委員会
奈良貴史1988「墓制について」『増上寺子院群』東京都港区教育委員会
野沢　均1988「まとめ」『八丁堀３丁目遺跡』東京都中央区教育委員会
橋口定志1990「中世東国の方形館とその周辺」日本史研究330号
橋口定志1992「1991年の考古学動向　中・近世（東日本）」考古学ジャーナル347号

1993a「町を囲うこと」考古学ジャーナル356号

橋口定志1993b「東京低地の中世城館と村」『特別展図録 下町・中世再発見』葛飾区郷土と天文の博物館

橋口定志1993c「埋納銭の呪力」『新視点日本の歴史』4巻、新人物往来社

橋口定志・水本和美1995「江戸周縁の町―巣鴨―」季刊考古学53号

橋本久和1990「中世成立期の土器様相」日本史研究330号

福島県文化センター1988「第3編 古宿遺跡」『国営総合農地開発事業 母畑地区遺跡発掘調査報告25』

福田千鶴1995「17世紀初頭における城郭政策の展開―城破りの視点から―」論集きんせい17号、近世史研究会

藤木久志1995『雑兵たちの戦場』朝日新聞社

藤沢良祐1995「中世陶器1）古瀬戸」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

堀内明博1991「近世都市京都の成立について」関西近世考古学研究Ⅰ

前川　要1991『都市考古学の研究』柏書房

森本岩太郎・小片丘彦・平本嘉助・吉田俊爾1985「Ⅳ章　人骨」『江戸―都立一橋高校地点発掘調査報告書―』同調査団

吉田伸之1992「都市の近世」『日本の近世』9巻、中央公論社